

第一章 神社・仏閣

久万町には一七座の神社と、一〇宇の仏閣がある。(愛媛県宗教法人名簿六三、一、一現在)

神社では明神地域に河内神社、高殿神社、金刀比羅神社、天満神社の四座、久万地域に久万伊勢大神宮と三島神社の二座、畑野川地域には総河内神社と住吉神社の二座、直瀬地域に五社神社と八幡神社の二座、父二峰地域に十二社神社、八幡神社、三訪神社、御調神社、葛城神社、金刀比羅神社、河上神社の七座がある。仏閣は明神地域に高山寺、久万地域に大宝寺、法然寺、正法寺、馬頭寺、川瀬地域に善通寺と浄福寺、父二峰地域に法蓮寺と福城寺、永仁寺と、合計一〇か寺ある。

以上の七つのお宮と一〇のお寺は、いずれも愛媛県が宗教法人として認可しているものであるが、このほかにも、神仏混淆の形態をとるものや、合併された跡地に小さなお堂をもつものなどがある。

一 神社

法人名	代表役員	認証年月日	所在地	包括団体
河内神社	丸山 勝甫	28・8・18	大字東明神	神社本庁
高殿神社	丸山 勝甫	"	西明神	"
金刀比羅神社	丸山 勝甫	"	"	"
天満神社	丸山 勝甫	"	入野	"
久万伊勢大神宮	佐藤 豊	"	久万町	"
三島神社	佐藤 豊	"	菅生	"



河内神社

口碑によると、その昔、社殿は洪水のため流出したことがあり、その時、水中に神霊を認め奉祀する。高知県に当社の分祀がある。また国司散位小子宿祢玉興、尊崇惜まず寺堂建立、付置として給いしほどなりと五穀豊稔の神として祀られ、明治時代には獅子舞も奉納されていたといわれている。本殿・拝殿・土蔵が建てられている。

1 河内神社

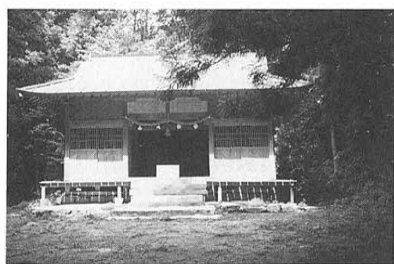
東明神字茶屋駄場甲一二二六六

祭神

素戔嗚命・大一比賣命・弥都波能賣命・猿田毘古命・大己貴命・少名毘古命・来名戸祖神・軻遇突智神

河上神社	横田 清光	"	"	"	"	大字上畑野川神社本庁
金刀比羅神社	横田 清光	"	"	"	"	"
葛城神社	横田 清光	"	二名	"	"	"
御調神社	横田 清光	"	父野川	"	"	"
三訪神社	大野 勘藏	"	露峰	"	"	"
八幡神社	大野 勘藏	"	露峰	"	"	"
十二社神社	大野 勘藏	"	"	"	"	"
八幡神社	黒川 玄	"	直瀬	"	"	"
五社神社	高岡 宇作	"	直瀬	"	"	"
住吉神社	込田 盛雄	"	下畑野川	"	"	"
総河内神社	込田 盛雄	28・8・18	"	"	"	"

(愛媛県宗教法人名簿 昭63・1・1現在による)

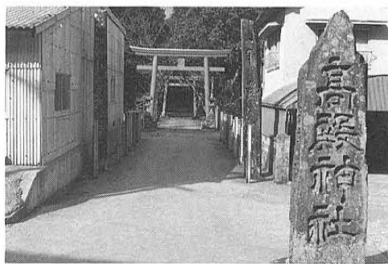


金刀比羅神社

元文五年（二七四〇）西明神大上組晃光寺境内にあった社を、庄屋梅木弥五衛門が寛保元年（二七四一）に現在の場所に移

3 金刀比羅神社
西明神字金比羅山三九八
祭神 大物主命

敬白』とある。
山東明神三島明神鰐口也、于時応永二二年（二四一六）九月二三日願主弥五郎正方



高殿神社

ゆえ、明神右京の霊をも合祀されており、縁結びと安産の神として信仰されている。
本殿・拜殿・土蔵がある。明治四三年五月一八日、東明神本組にあつた村社三島神社を合祀して祀っている。なおこの三島神社にかけてあつた鰐口が残り保管されているが、その銘には、『大日本予州浮穴郡久万

2 高殿神社

西明神字高殿二六七
祭神 高御産巢日神・本勝国勝長狭命・雷神・大山祇神・高麗神・明神右京要神

神代の昔、明神右京が日向国高千穂よりこの地に来た際、同地に祀られている高殿神社の分霊を持参してこの地に奉祀したのに始まると伝えられている。それ



久万伊勢神宮

創立年月は不詳であるが、中世以来、伊勢信仰が次第に盛んになるにつれ『御師』が滞在し、久万郷一円に神宮太麻を頒布し祈禱の取り次ぎとした。最近まで『伊勢ヤ』と称せられていたことによってもわかる。当時既に社殿を備え神

5 久万伊勢大神宮
久万町大字久万町五〇三
祭神 天照皇大神・豊受大神



天満神社

転したものと伝えられる。ここには、琴平に参拝できない信者が多数参詣する。縁日の旧一〇月一〇日には、素人大相撲の奉納が行われ盛大であったが、戦後は子供相撲となり、現在も続けられている。
ここからの一〇景として里村暮煙・水田夜雨・土城夕照・菅峰晚鐘・長谷川螢・北山晴嵐・高野秋月・遠伴貴賤・広里落鳥・西山暮雪が元文六年（二七四二）菅原陳護によって詠われた。

4 天満神社
入野字天神四七七
祭神 菅原道真命

天正年間（一五七二〜九二）に祀られたものと思われる。文字能書の神として参拝者があつたが、昭和一九年ごろ何者かによって焼かれ現在は何も残っていない。

宮の遥拝所としていたが、明治一五年、伊勢より天照皇大神、豊受太神の分霊を勧請し今日に及んでいる。明治初年以來、神宮教の久万山布教所であったが、本教の解散によって、明治三二年九月、神宮奉齋会久万支部として開設発足した。これも昭和二二年に解散、昭和三〇年に伊勢太神宮として設立し今日に至る。

6 三島神社

大字菅生一九〇

祭神 大山祇神・雷神・高麗神・大雀命・五男三女神を合祀

大宝元年（七〇二）、時の文武天皇の勅願によって菅生山大宝寺が建立された。しかし、神社のないことを嘆いて光仁天皇の宝亀四年（七七三）、越智郡大三島より大山祇神社の分霊を勧請し、久万山並びに太田山（小田郷）の総氏神とした。鎌倉時代になり北条時頼回国の際、当社に参拝し、帰国の後も崇仰篤かりしと伝えられる。戦国時代は大除城主・大野直昌がことのほか尊崇し、神輿渡御は自から供奉したと記録されている。



三島神社

更に徳川時代には、松山藩主加藤嘉明の重臣佃十成が極めて崇敬し、社殿の大改修をなした。当社は久万郷の総氏神であるため、明治の初期までは旧暦九月八日の大祭には二五か村の民家ごとく幟を立て提灯をともして奉祝したという。現在は、一月一、二日を大祭として地方祭が行われる。拜殿（単層入母屋造り、銅板葺き）は安土桃山時代の壮麗雄



総河内神社

渾な様式を残すものとして昭和三七年一月県文化財に指定された。

7 総河内神社

大字上畑野川

祭神 天穗穗耳尊・活根彦根尊・市杵島姫尊・天穗日尊・熊野杼禰尊・天津彦根尊・湍津嶋姫尊・田心姫尊

社伝によると、「大宝元年（七〇二）九

月二五日、菅生山大宝寺建立あり、護に付き給う神」とある。棟札には「永承四年（一〇四九）一二月初吉日」、次に「永祿二年（一五五九）、宝曆一一年（一七六一）二月一八日、火災全焼。同一三年（一七六三）一二月新築なる」とある。元来は旧定徳寺の守護神として祀られている。金刀比羅宮を本体としており、参拝者が多い。

8 住吉神社

大字下畑野川

祭神 表筒男神・中筒男神・底筒男神・息長疋姫命

この神社は、天正年間（一五七二）に大野直昌によって造営された。社記によると「数百年前大阪堺の神官当住吉神社の神霊を奉じて上畑野川字岩川組に来た時病に罹って東浦の小さい石上に憩いしと



住吉神社

ころ、隣家である山内吉郎右衛門の祖先気の毒に思いかいほうをしたが遂に病死した。後神霊を古戸神と崇め祀りその後現在地に遷宮した」とある。「天文一六年（一五四七）、住吉大明神舞殿造立再建」と書いた棟札が現存する。

9 五社神社

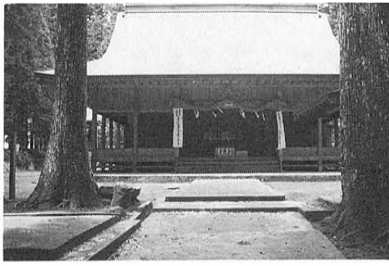
大字直瀬

祭神 足仲彦命・誉田別命・息長足姫命・姫大神・猿田彦命・

素盞鳴命・稲田媛命

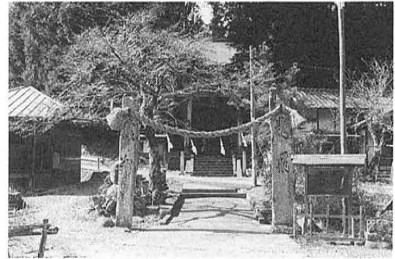
社伝によると、「日負八幡と称して、祀つてあるのは浮穴郡北番直瀬村に鎮座有るところで、現今の五社大明神の御殿内に合祀されてある。

天正二年（一五七三）秋、小倉丹後守直政当処を守っている時、国守河野屋形の命を受けて伊予・土佐の国境に接近する小田山、笹ヶ峠において土州長岡城主長曾我部宮内小輔泰元親と激戦、その際この八幡宮の御神体を背に負い毎日戦いに勤め高名を顕わした。ここによって日負の号を



五社神社

唱え称した。後直政居城館の西三町を隔てる土居と呼ぶところへ一祠を建立、日負八幡宮として奉祀した。また本殿には四所明神と呼ぶ古社があったが天正一八年（一五八九）に官命によって右の神々と一社に合祠した。よってこの時から五社神社と社号を改めた。文禄二年（一五九三）八月二十七日、直政没す。寛永三年（一六二六）一〇月、社殿等悉く焼失。同



八幡神社

四年（一六二七）二月、官命によって再建。当村の氏神として今日に至る。

10 八幡神社

大字直瀬甲五二六一

祭神 足仲彦命・誉田別命・息

長足姫命・相殿湍津姫命・

田心比賣命・市杵島媛命・

外六〇余神

神社縁起によると三女神は延暦二三甲申年（八〇四）六月一日、安芸国佐伯郡敵島より勧請する。六〇余神は神亀五戊辰年（七二八）九月二三日、天神七代、地神五代、一七神等国

守河野氏によって紀伊国熊野宮より勧請される。国中二六の中、八幡神社は建久三壬子年（一一九二）八月一日、山城国男山八幡宮より国守河野冠者伊予守通俊公によって勧請される。国中二二社の中、天正一八己丑年（一五八九）合社八幡神社と称するようになる。とあり、国碑には、「大昔、大和から八幡神社を勧請し薦巢に祭り、後下直瀬古殿に遷宮、更に現在地に移す」とある。国家鎮護・産子繁栄・五穀成就の神等である。また、武の神として特に勝負に関係のある人々が崇めている。地鎮祭といって旧三月三日はにぎわい村芝居が開かれる。

11 十二社神社

大字露峰乙三九九

祭神 熊野権現ほか

神社縁起は不明。ずいぶん古い時代から、病氣平癒や災難除けとして



十二社神社

地域住民の信仰を集めていた。現在の社殿は、明治時代に神社を整理したときに造営したものである。縁日は一月四日。

12 八幡神社(大元八幡)

大字露峰大元森

祭神 田心姫命・湍津姫命・市杵島

姫命・誉田天皇・大帯姫

命・合祀・天管穂積命



大元八幡神社

社記によると、崇峻天皇の御宇庚戌三年(五九〇)八月一五日、自筑紫胸肩宮国司小子宿祿益躬によって遷宮されたといふことである。更にその後、保延乙卯元年(一一三五)八月一五日、山城国、岩清水八幡宮から国主河野仔市守親清によって遷宮され、国中二六社の一社として建立された。毎年、夏の土用と旧八月二日には氏子が集まる。土用は農作物の豊穡、家内安全を祈願し、旧八月二日にはその御礼として酒を持参し祭典を催した。近郷近在からの参拝者や相撲でにぎわった。現在も毎年子ども相撲が開かれている。獅子舞い等も出たと言ふことである。

13 三訪神社

大字露峰乙七〇八一



三訪神社

祭神 大山祇神ほか
神社縁起は不明。大昔、獣に山林や田畑を荒らされて困り果てた地域住民が、山の神として小田深山に祀られていたご祭神を、「当地域を守ってくださいるなら勸請します」と願をかけ、その願い通りに深山から遷宮し、三訪神社と改め、五穀豊穡の神として祀ったものである。社殿は、明治四一年に造宮しなおした。また、学校敷地等の関係から境内を三度移転している。祭日は一月四日である。

14 御調神社

大字父野川字馬野地

祭神 倉稲魂神・保食神・雅霊神、天正一八年、次の神を合祀した。来名

戸祖神・級長津彦神・級長戸辺神・伊弉諾神・伊弉册神・天満尊・

天照皇大神・月夜見神・大日靈貴大己貴命・少名彦命

創立年月日は明らかでないが古い社である。毎年八月一五日におこも



御調神社

昭和三九年に神社境内の杉・桧だけを残して、他の雑木を全部伐採したので、社殿は明るくなった。



金刀比羅神社

口碑によると、享保二年（一

き地を伐り開き移民の法を設けて、往時より祀っていた饒宮二名古社と称する饒速日命を祀る」とある。古社へは同じく一言主神・味鋸高彦根神を遷宮してこの鎮護の神として祀る。後鳥羽天皇の建久三年（一一九二）八月一五日、国守河野伊予守通俊は山城国男山八幡宮を勧請して国中二三社を祀り応神天皇を祭神とした。その後、後土御門天皇の文明三年（一四七二）九月、菅公の霊を京都北野天満宮より勧請して祀った。本殿・中殿・拝殿・神饌所等が建てられている。

16 金刀比羅神社

大字二名字中条

祭神 大物主命・金山彦

命・大己貴命・菅

原道真命・素盞鳴

命



葛城神社

15 葛城神社

大字二名字永田ノ森

祭神 一言主神・饒速日命・味鋸高

彦根神・応神天皇・菅原道真

命

社記によると、「天武天皇の御宇朱馬元丙戌年（六八六）国司散伍伊予守小子宿祢玉興は、大和国葛城山から役の小角を伊予国に迎え、深山原野、人の住居な



河上神社

17 河上神社（葛城神社末社）

大字二名字上厚

祭神 素盞鳴命

七七一）三月一〇日、金刀比羅宮を遷宮して福德の神として祀る。嘉永元年（一八四八）二月、社殿を改築した。明治六年の定格とともに金刀比羅神社と改められた。明治四二年四月、八坂神社・天満神社・八幡神社が合社された。

手の現在地に社殿を造営して祀っている。明治六年四月、社号を河上神社と改称した。本殿・拝殿がある。

以上のほかに、明治三九年に出された勅令により、四〇年代にお宮が整理統合され、その際廃止されたものが各地域にあった。統合されたために、そのご神体はないがお宮の敷地や建物が残り、お堂として今なおその集落に存在しており、人々の心の支えとなって祀られているものがある。

また、俗信的なものや講といった形態をもつものなど、さまざまな風習を交えながら、その大略を記しておきたい。調査不十分な部分もあるかと思うが、ご寛容いただきたい。

二 地域独特のもの

行事	所在地	内容
<p>龍神社 天満宮 六十余尊</p>	<p>東明神 縦ノ木</p>	<p>知多津美神と大龍神、雷神を祀っている。 口碑や棟札などによると、藩政時代に久万山代官所の雨乞い祈願所として創立されたものである。当時は代官所からの委託によって、東明神村が管理していた。旱魃期には代官が手代や庄屋を従えて参籠し、雨乞い祈願を行っていた。現在も七月一三日を祭日として祀っている。 菅原道真と六十余尊を祀っている。 菅原道真と六十余尊は、もともとは別々に祀られていたものである。 菅原道真は、当地に住んでいた鍛冶屋が「輔天神」として祀っていたもので、鍛冶屋をやめるとき六十余尊と合祀したものである。 六十余尊は、病氣平癒の神で九州のほうから勧請したものだそうだ。ご神体は一五cmほどの木像二体である。 七月二三日と一月二日、一二月三日の日には祭礼を行っている。 祭神は菅原道真である。社記によると「住吉国主河野旗下梅木但馬守、入野天神ヶ森ニ居城ノ時、祖先ノ靈徳ヲ敬慕シ、城地ニ社殿ヲ建テ、奉祠セリ。ソノ後、天正年間(一五七二〜一五九二)ニ落城ス。村民、城山ノ麓ニ社ヲ建テ、守護神トシテ信仰ス。明治初年、御改メノ際、氏神高殿神社境外社ト完格セラル」とある。 昭和一九年に焼失し、現在は小さな祠があるだけ</p>

行事	所在地	内容
<p>秋葉神社</p>	<p>東明神 野地</p>	<p>祭神は秋葉権現である。 元禄二年に遷座したものであるが、後に祭礼を怠っていたところ、次々と火災が起り、一七軒も焼失してしまった。そのため、昭和三七年に改めて高知の秋葉神社より分霊し勧請した。それ以降火災はこの地域でなくなったという。 ご神体は木像の立像だそうで、一月八日の祭礼には玉串をささげ、般若心経を唱えることにしている。お堂での読経の後は、般若心経を納めた箱をかついで組内の各戸を回り、災難除けの祈願をする。</p>

久万	久万町内 全域	内容
<p>新四国 八十八か所</p>		<p>大正のころ、西森寅吉と梅本音吉が主となって、旧久万と明神地域に開山したものである。 四国八十八か所を巡拝するという信仰形態は、古くからあり、特に若い娘さんの嫁入りの条件にさえなっていた地方もあった。 とはいえ、健康に自信のない人や高齢者、また経済的に余裕のない人などにとっては、困難なことであった。こうした人々の願いに応えようと開かれたものであった。 昭和二〇年の終戦を境に、こうした信仰もすたれてしまった。昭和五〇年代に入ると、壮年会を中心に「久万山新四国」の発掘の気運が高まり、五四年には「久万山新四国の道しるべ」が発行されるに到った。この発掘調査には、久万町壮年会明神分会や野尻の明友会(老人クラブの名称)が主として活動</p>

十七夜	菅生	青木大明神	久万 曙二	牛頭天王	野尻	日切地藏尊	下野尻 日切
<p>した。五九年三月には「久万山新四国巡拝案内図」が、久万町壮年会明神分会の手で発刊されるに至った。</p> <p>三坂峠から中野村、下野尻と、その祀られている地域が広範に及んでいる。また、明神の皿木奥の地獄谷などの険しい地形の所などがあり、昔から、一泊二日の行程であったという。</p> <p>戦国時代に長曾我部の軍が伊予に攻め寄せた。そのとき戦死した武將を祀ったものである。祀つてある場所が、伊予鉄バスの久万営業所の屋敷内だったので、他の場所へ移転させようという動きもあった。が、その意見の先達をしていた人が急死したので、「これは青木大明神のお怒りじゃ」とか、「あの元氣だった人が急に狂い死にをしたのは青木大明神のたたりじゃ」とかいう声が出だして、移転する話はやまってしまった。現在も八月最後の日曜日祭の日とし、子ども相撲を奉納している。</p> <p>厄除の神として祀られている。旧の六月二七、二八日を祭礼日として近所の人や組内の人がお詣りをしていて、また、七月中に「お籠り」も行われている。</p> <p>地藏尊がいつごろから祀られたかは不明である。四国新道が完工するまでは、久万川沿いの田んぼの細道のそばに祀られていたが、明治二五年（一八九二）四国新道が開通したことにより、参拝者が増えた。そのため現在地に近い岩陰へ移した。さらに、国道三三号線の改修によって現在地（下野尻の町外れ、新旧国道三三号線が出合う所）へ移したのである。地元では「お日切りさん」といって親しまれており、日を限って願をこめると、霊顯があるといわれている。</p> <p>大宝寺の縁日で、戦前までは、菅生地域の青年団</p>							

神明神社	北村	耳殿神社	北村	淡島神社	北村	八面神社	中組	牛頭天王	中ノ村	大元神社	中ノ村
<p>員が、観音縁日の旧六月一七日に、三三灯籠を寄進勸進し、大宝寺の参道に立って、身体健全、無病息災を祈願していた。また、集まった若い人たちは力自慢を競い合い、境内にある石を持ち上げ「力競い」に興じたりした。</p> <p>祭礼ははっきりしないが、神輿がある。</p> <p>大正時代の太旱魃のときなどには、久万川の氾濫で、川の底上げをして雨乞いを祈願していた。夏祭りと秋祭りがあるが、いずれも久万地方の日と同じである。</p> <p>祭神は不明。でも、耳の病いをもつ人たちが、今もときおりお参りに来て、耳の病いがありますようにと、お祈りをしていいることがある。ここも夏祭りと秋祭りが行われている。</p> <p>ご神霊は淡島さまだという。婦人病に靈頭があるというので、婦人のお参りが多いそう。毎月三日が縁日で、この日は女の人が頭につける髪飾りを持ってお参りするということだ。</p> <p>悪い病気をなおしてくれるということだ。六月には各戸から一名ずつ集まって「おこもり」をしているそう。この日は、町内会の代表者が組内の者から寄附を集め、酒さかなを用意しての行事となっているそう。</p> <p>大宝寺山内に祀つてある。お正月の月、一五日までで幼児がお参りすると、その年は夏の病いにかからないといわれ、正月の一五日まで、幼児を連れた参拝者が多い。</p> <p>三島神社の分霊</p> <p>菅生の三島神社の遥拝所として創設されたものである。ご神体は木像で、夏祭り（七月一八日）と秋祭りがある。</p>											

槇谷	
行事	所在地
素鷲神社	槇谷
<p>祭神は、建速須佐之男命と牛頭天王である。 大宝元年（七〇一）六月、小千玉興が^{出雲の国}から建速須佐之男命を勧請し、出雲ノ宮と称した。天正一八年（一五九〇）、京都祇園の牛頭天王を迎えて合祀し、牛頭天王ノ宮と称するようになった。その後享保二年（一七一七）に現在地へ移転し、素鷲神社と改めた。 二月一五日の春祭、七月一五日夏祭、一月一日二日の秋祭、一月一五日の冬祭と、年に四回はお祭りがとり行われている。</p>	

畑野川	
八社大明神	河ノ内
渦脇八幡	下畑野川 上田
<p>祭神は、上畑野川の総河内神社に合祀されている。当社は、河ノ内の集落が形成された当時に創設されたものである。明治の神社統廃合により、その祭神が総河内神社に合祀されたものである。ご神体はなくても、組内の者（氏子）で社殿を修復し、現在も守られている。なお、縁起絵巻が伝えられており、七月一日と一二月の三十一日には祭礼も行われている。関ヶ原の合戦に出陣した上田組の若い衆を祀ったものであるという。 関ヶ原の合戦の際、松山藩の兵隊集めに、上田組の若い衆に『元気で帰って来たら、上田組のいちばんいい畑をやるから、行ってくれ』と頼んで行ってもらった。若い衆が元気で帰ってきたのに、組の人たちは約束を守らなかった。こればかりか、組の人たちは総がかりで、その若い者をなぶり殺しにしまった。 その後、上田組に疫病が大流行し、困った組の人々</p>	

行事	所在地	内容
		<p>が山伏にみてもらったところ『関ヶ原の合戦に出陣した若者のたたりだ』といわれ、ここにその若い衆を祀ったものだという。</p>

直瀬	
五社神社	房代野
麓の宮	永子
金比羅さん	上直瀬 中組
三訪さん	上直瀬 中組
<p>明治の神社統廃合により、上直瀬の五社神社へご神体は合祀されている。合祀、移転となっても、社は残っており、房代野の組内では七月一五日には幟を立てて祭礼を行っている。 明治の神社統廃合により、上直瀬の五社神社に合祀されたが、もともとは、大山しずめとして大山祇神社より分神を祀っていたものである。現在も七月二五日には、氏子（永子組内の者）が幟を立てて祭礼を行っている。 このお宮もご神体は上直瀬の五社神社に合祀されている。が「あん」という小さな集落の人々が現在も毎月一日と一〇日の日にはおまいりをし、あんの守り神として、そのほこらを守っている。 旧直瀬村に「勝山城」という、大除城（久万町菅生擲ノ沢にあった）の出城があった。その城主、鳥越左門豊祇（広島の人）を祀ったものである。今は建て物はなくなっているが、それにまつわる諸行事は、中組の人々によって行われている。 盆の一日日には、鳥越左門の霊を慰めるため、各戸から一人ずつ、タイムツをともしそのお墓に集まり、お念仏をあげる。（現在の火祭）そのときに使う鐘（タタキ鐘）には、次のような銘が刻まれている。 宝永八年 卯年二月 室町住 出羽大掾^{でわだじょう}宗味作、 施主 伊与松山浮穴郡久万山内直瀬村中寄進、</p>	

<p>須我神社 龍神 堂山神社</p>	<p>下直瀬 駄馬 一ノ谷 下直瀬 中通</p>	<p>願主 心坊 鐘の他に太鼓と大きな念珠が伝えられている。 なお勝山城は、大除城三二番の出城のうちの一六番目の出城である。 祭神は牛頭天王と素盞鳴命、稲田姫命だといわれる。天王さんともいわれ、一月の三日には駄馬組の人々が集まって、一年間の安全祈願を行っている。すぐそばを流れる直瀬川の龍宮淵の龍神を祀ったものである。大水が出たり、日照りのときなどに、地域の人々が祈願をこめるのだという。 また、この淵には白蛇が住んでおり、金物を嫌うといわれ、淵に金物を入れると大雨が降ると伝えられている。 祭神は摩利子天と金山彦命、天村雷神、猿田彦命の四柱だという。元吉久の丘の上にあったものである。現在の社殿が寛政元々二年（一七八九〜九〇）に造営されているから、その場所に遷宮されたものであろう。 古来より勝負の神としてあがめられており、戦時中は戦勝祈願に訪れる人も多く、出征軍人は必ず武運を祈りにお参りをしたという。今でも選挙の時に当選祈願に来る人がいるそうだ。現在は、一月四・五日に冬祭りが行われており、当日は子供相撲が奉納されている。</p>
<p>山神神社</p>	<p>露峰 西ノ川</p>	<p>父二峰 いつのころかわからないが、大山祇神社から、大山鎮めとして分神をお祀りしていた。現在は大元さんに合祀されている。だが、現在も山ノ神祭と称して、一月には「山の口あけ」に、山林作業の安全と山林火災の防止を願う祈願祭が行われている。</p>

お天王さん

二名
東条

幽谷祭り

下畑野川
上田

祭神は牛頭天王で、ご神体は一尺ほどの木の坐像であったという。現在は葛城神社に合祀されている。小さな祠であったが、明治三〇年頃に現在のお堂を建立した。昔は子どもたちがよく境内で遊びたわむれ、人々からも「小神さん」と親しまれていたそうである。

その後、石鎚信仰が盛んになるにおよび、畑野川の石鎚信者によって、金属のご神体三体が祀られた。

このお堂は四国遍路がよく寝泊まりをしていた。これら遍路が持ち出したものかどうかわからないが、さきの三体のご神体のうち二体が紛失してしまった。そこで残りの一体を永仁寺に移し、管理してもらっている。

年に一度、農閑期に「お籠り」が行われる。お籠りの世話は輪番制で当番が決まっており、当日は牛頭天王と石鎚神社の幟を立て、酒は組が用意し、料理は各自持ち寄りとなっている。

一七八〇年ころに、宇和島から、幽谷上人という方が来られて、この地で入定したと伝えられている。

境内には仏体や墓石、位牌、阿弥陀堂、行場、念仏を刻んだ石一〇数墓がある。昭和四〇年ころは、だれが奉納したのか鉄の大きな錫杖と高下駄もあった。が、この二つはいつのまにかなくなっていた。

上人は、自分の死が近いことを知るや、阿弥陀堂の床を掘り、自らその穴の中に入り、村人の上に小さな空気穴一つあけて、あとは全部ふさいでもらった。そして「この鐘の音が聞こえなくなったら、定に入ったと思ってくれ」と言い残したという。穴の中にもって二一日目に鐘の音がピタリと止んだという。

行事	鬼のこんごう
所在地	二名地域 父ノ川地域
内容	<div data-bbox="665 421 1141 736" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="802 749 998 774">幽谷上人に入定の地</p> <p>また、上人が宇和島にいたころ、火災除の祈願をしたことがあると伝え聞き、火除の祈願をする人もいる。そのほか「足立ちがよくなる」といって、足の悪い人が下駄を奉納して足の病が治りますようにと祈る人もいる。</p> <p>上田組では毎年一二月一日に、上人の追善供養を行っている。大正時代には盆と正月に、ご馳走を持ち寄り、草相撲なども奉納していたという。</p> <p>鬼のこんごうは、「この集落には、このように大きなワラジを履く大男がおおり、力も強いのだぞ」と悪魔におどしをかけるためのものである。だから、その集落の入り口に谷を渡してつるすのである。この大ワラジを見た悪魔は、恐れをなして、その集落へは入って来ないということである。</p>

行事	厄落し 三倍申
所在地	町内全域 町内全域
内容	<div data-bbox="830 1253 1131 1690" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="912 1704 1045 1729">鬼のこんごう</p> <p>一月の一五日に大ワラジをつるす風習は、ずいぶん古くから伝わっているようだが、現在では村おこしの一環として、二名と父野川の二つの地域にのみ残っている。</p> <p>男子は二五、四三、六一歳、女子は一九、三三、六一歳が厄歳で、そのときには「繫の祈願」といって節分にお寺やお宮で「厄除」の祈願をしてもらう人がいる。また、厄年の人がその厄の数だけ鬼の豆を紙に包み、その中に小額のお金を入れ、それを道路の交差点に捨てたりもする。こうした厄落しの風習は、町内のあちこちに現在もみられる。</p> <p>三番叟ともいう。斉藤別当実盛という武将が、稲の切株で一命を落とす、稲の害虫になったという古事にちなんで、農家では、田植えのとき田の中央にウツゲの木や、カヤ、ワラなどを束にして立て、その上に煎り豆やお菓子、イリコなどをお盆にのせて置く。田植えが終わると、そのお供物はみんな分けあって食べてしまう。そうすることで、稲の害虫除をする風習は、町内の全域でみられる。</p>

念仏講	終戦前は町内にいろいろあったようだ。が、最近 は数少なくなっている。辻や直瀬の一部、父二峰の 一部に、その風習が残されているようだ。 この行事も落合が伝統を守っているだけだ。年に 三回、落合の組内各戸一名以上が参加し、念仏を唱 える。このならわしもすたれていったものの一つで ある。 昔は早敷のときに、よく行われていた。高い山の 上や高台で、草や木を刈り集め、雨の降ることを祈 って火をたいてた。現在は全くみられなくなってい る。
地藏講	
雨乞い	

三 仏 閣

1 高 山 寺

大字東明神一二二五

真宗大谷派東本願寺末 獅声山高山寺

本尊 阿弥陀如来

江戸時代初期より開山したらしいが、
万延元年（一八六〇）八月、大火のため全
寺焼失した。直ちに信徒有志等が再建に
努力し、文久三年（一八六三）五月完成す
る。しばらくは住職が不在であったため、
本尊、檀徒位牌等は地域で管理をしてい
た。その後西中島から山田真月が当地に
巡錫し、信徒の要望によって第一世住



高 山 寺

職となる。現在第三世山田健郎住職が護持している。かつて明神地区に
は、新見堂・西の新坊・更城寺・普西寺・見光寺・報恩寺・観音堂が
あったと伝えられている。

2 法 然 寺

大字久万六二

浄土宗知恩院派 口称院万徳山法然寺

本尊 阿弥陀如来

建永二年（一二〇七）二月、宗祖法然上
人は勅勘を蒙り土佐に配流された。実際
は、当時の関白九条兼実の計らいで弟子
瑞蓮が身代りとなった。承元元年（一二
〇七）二月八日、勅免の宣旨が下り帰
洛の途中当地に留錫し、念仏を布教し
た。この因縁により堂宇が建立され、法
然寺と称して開山した。久万一円を檀家
として今日に至る。現在第一八世乗松義
章が護持している。

3 正 法 寺

大字久万一四八五

日蓮宗身延山久遠寺末 一乗山正法寺

本尊 日蓮上人

元三津新立正念寺住職であった日明上
人によって、安永二年（一七七三）三津住



法 然 寺



正 法 寺

吉町に建立開山される。その後廃寺同様となっているのを、第四世謙融日正上人が昭和九年に住職となり、昭和一七年三月一八日に当地に移転し復興に努めた。現在は本堂、客殿、山門、庫裡（改築）と、次々建造され寺観も一新し、第五世正教日尚が法燈を継承している。

4 馬頭寺

大字上野尻乙二五二の一

真言宗醍醐派

本尊 馬頭観世音



馬頭寺

法然寺の末寺として明暦以前（一六五五）から建立されていたようである。郡内の牛馬の守護として今日に及んでいる。戦後、宗教法人法の施行に伴い今日では真言宗に属している。

5 大宝寺

大字菅生一一七三

真言宗豊山派 大覚院菅生山大宝寺

本尊 十一面観世音

昔、明神右京・隼人なる兄弟の狩人が一日の狩を終えて家路について、東の山中に光るものを見つけ翌朝その光りを探したところ、菅草の中に十一面観音像が安置されているのを発見した。そこに草庵を結んで尊像を祀った。その後、大宝元年、時の帝文武天皇の勅願によって大宝の年号をとり創建された。平安時代、弘法大師四国霊場開創に際し、当



大宝寺

山に三密の秘法を修し第四番の霊場となる。仁平二年（一一五二）焼失。保元年間（一一五六〜五八）後白河天皇が御脳の病になられた時、当山に勅使が参詣し当病平癒の祈願を込めた。祈願成就なって多額の浄財を寄進、それによって菅生に四八の僧堂坊舎が建立された。あわせて御皇妹の宮が住職としてこられた。現在、勅使橋の遺跡がある。また御白河天

皇御自筆の『菅生山』の勅額を賜った。当時から嵯峨大覚寺の末寺として江戸時代まで管理されていたものと思われる。後、中興第一世雲秀方丈が享保九年（一七二四）に住職となる。寛保元年（一七四一）久万山農民一揆の騒動が起り農民大洲領に逃散する。藩からの再三の帰山の要請にもかかわらず帰らない。そこで思いあまった藩主は、時の斉秀方丈（第四世住職）に農民への説得を懇願した。斉秀方丈の努力によって農民は帰山した。そのため藩から一五〇石の定米の奉納があり、よって国守の祈願所となる。明治七年、塔頭理覚坊を残し他はことごとく焼失した。当時は四八坊の内一二坊が残っていたと記録にある。その後、明治時代に大師堂・護摩堂・庫裡を再建、大正年間に本堂・鐘楼堂を再建、昭和三年に仁王門・総門、昭和三八年に宮殿・方丈を再建し、完成する。享徳四年（一四五五）の仁王尊、嘉吉三年（一四四三）の三三灯籠台（県有形文化財）、昭和九年に発掘された掘出観音像（約八〇〇年前）、境内には寛保三年（一七四三）芭蕉翁五〇年忌追善供養に造立した芭蕉塚、昭和二

五年に第二次世界大戦の郡内の戦病没者の芳名を刻み込んで鑄造した「平和の鐘」等がある。参道の老杉は寺の歴史を物語る。現在は第二十世信康が法燈を護持している。



永仁寺

6 永仁寺
 大字二名二〇一
 真宗大谷派 内照院無量山永仁寺
 本尊 阿弥陀如来
 永仁元年（二九三）温泉郡北平村に釈正禅僧正によって開山される。初め天台宗であったが、天正年間（一五七二）九二）父二峰二名城主・宮田右京之進道俊によって現在の地に移転された。真宗に



福城寺

改宗して今日に至る。慶応二年（一八六六）より大正一一年まで住職はいなかった。現在第一五代春祐が住職として法燈を護持している。
 7 福城寺
 大字二名一八四八
 真言宗豊山派大宝寺末寺 擁護山福城寺
 本尊 釈迦如来
 享保元年（七一六）菅生山大宝寺を本寺として、栄仙法印によって創建されたと伝えられている。ほとんど大宝寺の住職が兼務していたが、第二次世界大戦からは住職をおくようになった。現在第一



法蓮寺

八世木村道雄が護持する。
 8 法蓮寺
 大字露峰一四二七
 曹洞宗永平寺派 花谷山法蓮寺
 本尊 釈迦如来
 寛保年間（一七四一〜四四）才庵文覚禅師によって開山される。明治一九年に暴風のため本堂等倒壊。同二〇年に再建する。昭和一八年、位牌堂、同三五年、鐘



善通寺

9 善通寺
 大字下畑野川二三三五
 臨済宗東福寺派 永隆山善通寺
 本尊 十一面観世音
 下畑野川寺の後甲九四五番地に東福寺の直末として、東福寺第一一世南山土雲禅師が開山した。年代は不詳であるが「東福寺誌」によると、応永二一年（一四一一）以前に建立されていたようである。その後、久万山庄屋土居三郎右衛門の淨財寄進によって中興された。畑野川地区には、明杖に常徳寺、西ノ浦に常善寺と

いずれも延命地藏尊を本尊として寺が建立されていたが、昭和三年一月一五日、善通寺に合寺されて今日に至っている。昭和三十六年、現在地に移転新築される。現在住職第一四世香州土耕が法燈を護持する。

10 浄福寺

大字直瀬一二六八

臨濟宗 東福寺派 慧光山浄福寺

本尊 釈迦如来



年代は不詳であるが雲巖禪師によって

開山された。現在第一三世大宗が住職をしている。火災のため全くなにもわから

ない。かつては妙心寺派に属していたが、

昭和二五年ごろから東福寺派となる。な

浄福寺 お下直瀬中通には、薬師三尊を祀る薬師

堂がある。本尊に薬師如来、脇仏に日光

・月光菩薩を祀り、十二神将の眷属もま

つっている。伝えによると平安時代の末

期から開山されたということである。

四 その他の信仰

ア、開所年月日、開教者、教会所

イ、開教所世代

ウ、信者数

エ、祭日

オ、その他

1 キリスト教 日本キリスト教団

ア、大正九年、外人宣教師の寄付金により税務署跡（現久万公民館）に伝導所が開所される。昭和二九年二月、現在の場所（福井町）に移される。

ウ、二〇人程度

エ、毎日曜日礼拝、聖書勉強会、復活祭、クリスマス祭。

2 石鎚本教

ア、昭和二六年一〇月、住吉町に上浮穴郡教会所が、金子伊勢松によって開所される。

イ、初代金子伊勢松、第二代露口政一、第三代山田亭馬、第四代金子敬

一郎（現在）

ウ、約五〇人

エ、毎月の祭り、一〇日。春の大祭、三月一〇日。夏の大祭、七月一〇

日。秋の大祭・九月一〇日

3 黒住教

ア、文久二年（一八六二）住安町に久万教会所を与平が開所する。明治元年（一八六八）明神の皿木にできた明神教会所（現）に吸収し正式に黒住教明神教会所となる。

イ、初代 石田佐吉、第二代 石田精三郎、第三代 石田佐々雄、第四

代 石田精二（現在）

ウ、数百人

エ、毎月第一日曜日 定会日

4 天理教

ア、明治二八年、大野松五郎によって入野に開所される。明治三七年、曙町に移転され現在に至る。

イ、初代 大野松五郎、第二代 矢野万次郎、第三代 片山末五郎、第

四代 片山寛三郎、第五代 片山一利（現在）

ウ、数百人

エ、毎月の祭り、一〇日 二六日。春秋例祭

オ、昭和一六年、分教所が近森ミツによって上直瀬に開所される。第二

代 大野幹太郎、第三代 大野良行（現在）

5 金光教

ア、大正六年五月、小黒富繁によって久万にはいる。同年十一月、正式に認可される。

イ、初代 河原正三郎、第二代 河原ヤス、第三代 河原公志、第四代

河原初子（現在）

ウ、二百数十人

エ、春祭り、御本体系り 五月六、七日。秋祭り、教祖大祭 十一月六、

七日。月並祭 七日、一五日、二五日

6 創価学会

ア、昭和三年五月、菅生、大野泰弘の入信に始まる。

ウ、数百世帯

エ、毎月四〇人程度本山大石寺に参拝す。

オ、特定の集会所を持たず、信者の家を座談会式に持ち回る。

7 立正佼正会

ア、昭和三八年四月、露峰の鈴木カツコによって久万法座所が開設される。

ウ、約一七〇人 郡内一円

エ、毎月一日、支部御命日。五日、虚空蔵菩薩御命日。一〇日、妙佼先生御命日。一四日、七面大明神御命日。一五日、釈迦牟尼御命日。二

〇日、鈴木家御命日。二五日、法座所御命日。二八日、八幡大菩薩御

命日、春花祭。一〇月一三、四日、御万灯御縁日

8 その他

わずかではあるが、生長の家・PL教団・霊友会大本教・メシヤ教等が信仰されている。

五 信仰の移り変わり

民俗部門は全般的に移り変わりがはげしいが、特に信仰に関する事象にはそれがみられ、既に消滅したものが予想以上に多い。その原因としていろいろな点が考えられるが、概括してみれば、①主として自然科学に関する知識・技術の発達普及、②第二次世界大戦後の混乱による伝統継承の軽視、③人口、特に継承者である若年層の減少、④終戦を境としての価値観の変化等の諸条件を挙げることができよう。

宗教本来の意味からすると、すべての進歩発展の前には、あらゆる迷信、俗信の類が次第に打破されていくのは当然のことである。とはいえ、過去の生活感情にまつわるほのぼのとした追憶、天地自然の壮大な営みに対する畏敬の念等に至るものまでをも葬り去ってしまう必要はない。

またたとえその事柄が直接目に見えるような利益をもたらさず、一見無価値なように見えたとしても、そうした風習に伴い行事を実施して行くことによって家庭生活や、地域の共同体としての生活にある種の潤いを与えていることを思えば地域住民こそぞって祝ったり、祭り事を催したりすることに、また大きな意義がある。

この章をしたためるに当たり、おおまかに、予想していたいくつかの問題点及び予想外であった点について触れておく。まず前者について述べてみよう。久万町は、大宝寺・岩屋寺・浄瑠璃寺を結ぶ四国霊場巡拝の道筋に当たるところから、信仰の具体的形態に身近に接する機会が多く、門前町として発展した。これが外部との交渉を更に密接にし、しかも積極的に行わしめたものと思われる。また一方、この門前町は土佐街道の宿場町として栄えたこと、近郷山村の物資の集散地として中心的位置を占めていたことなどもあわせて考えるべきであろう。農山村の特色である農耕に関する儀礼及び行事が大部分を占めていることはいうまでもない。後者は、山村集落の閉鎖性が特に認められなかったこと、行政区画上は大洲藩(旧父二峰村・旧久万町の一部)と松山藩にわかれていながら両者の間に全く著しい差が認められなかったこと等である。すなわち久万全域にわたっての宗教的行事は、全く共通性に富み格別特異なものとは認められない。ただ土佐街道に沿っていながら、直接明治の排仏毀積しやくの影響がなかったように思われる点と、各小組のほとんどに観音堂・薬師堂・天王堂・権現堂・大師堂・地藏堂等が建立されており、これは大宝寺から勧請かんじようしたものでないかと想像される点、特に父二峰地区のそれらのほとんどが大宝寺、又はその末寺である福城寺から出向

いて勤行等、宗教的行事(主に仏教に関連したもの)を行う場所として利用されていることなどが認められたに過ぎない。

なお、ところどころにわずかではあるが憑靈現象ひょうりやうを認めたけれどもそれを詳しく調べることはできなかった。

諸宗教は、山村ながらほとんどの宗教がわずかずつではあるが教線を張って信仰されており宗教に対する寛容性、曖昧あいまいさといったものが認められた。